

## ご 寄 稿

### 「五一の手習い」その後

部長 西川 伸一

前号に書いたとおり、一昨年一〇月からギターを習いはじめた。上達ははかばかしくないが、なんとか一年半近く続いたことになる。

合気道であれば昇級昇段審査会があり、それが競技者のモチベーションを高めているはずだ。楽器にはそれがない。代わるものとして発表会がある。私の通っているギタースクールでは、六月と一二月の年二回、発表会が行われている。もちろん、自由参加ではある。とはいえ、恥ずかしがって逃げていては上達しないだろうと殊勝なことを考えて、いずれも参加した。

発表順は初心者からはじめて後半は上級者で、最後に講師演奏が披露される。昨年六月のはじめての発表会では、私の発表順は四番目であった。その前の三人は小学生である。舞台袖で出番を待ちながら、「小学生より下手な演奏はできないな」とプレッシャーを感じた。舞台に出て座ってギターを構えると左足が震えだした。結局演奏中ずっと震えたままだった。このときは、その後予定があったので、すぐに会場をあとにした。

昨年一二月の二回目の発表会では、演奏順は一八番目に繰り下がった。ただ、これは私とその順番にふさわしいくらいに上達したためではない。午前中に仕事が入りそうだったので、順番を後らせてもらったからにすぎない。本番では足こそ震えなかったが、ミスタッチが多く思い通りの演奏からはほど遠かった。練習不足は明らかだった。

演奏前に楽屋入りすると、女性の方から声をかけられた。なんと一五年近く前の私の授業の履修者だという。彼女とはひょんな縁があって、在学中に彼女は友だちと子ども、拙宅に遊びにきている。結婚して名字が変わったのでプログラムでは気づかなかったが、当時の彼女の面影がよみがえってきた。信じられない偶然に、人知を越えた意思の働きを感じざるを得なかった。

今回は自分の演奏後も会場にとどまり、上級者の演奏も鑑賞することにした。うまいのなんの。どうあがいてもこのレベルには届きそうもないと嘆息するほかなかった。終了後、懇親会にも顔を出し、上級者の方々とお近づきになった。もちろん、ギターを離せばふつうのおじさん、おばさんである。「自分だって！」と私の中でスイッチが入った。

帰りがけに、ギタースクールを切り盛りしている方から感想を求められたので、「今後さらに精進します」と答えた。すると、「相撲取りの口上じゃないんだから、楽しくやって」と笑われた。確かに「音学」ではなく「音楽」だなと得心した次第である。

さて、この二年間部長を務めさせていただいた。現役の部員はもちろん、駿台会ではOB・OGの方々にもほんとうによくしていただいた。心からの御礼を申し上げて筆をおくことにしたい。